



特 18
1833
72

繪本右圖記六篇卷之十二

目錄

白秀次之妙快活

如吹園白殿下と凍りまの園

石田三成智溜用白活

後若殿より員女と送る路の園

秀次之被石極本倉女活

日園

秀次之苑見乃園

秀次之厨人よりと喰せ給ふ園



蓋唐法印字と女乃令と取入國

秀次公悪外活

賢者の退き不賢者の進む國

秀次公比叡とを御藩の國

本村常陸公謀奉討を國活

本村常陸公治水の城人悪び入國

支雄奇と淡どる國

續本古園記の篇卷之三十一

國白秀次公外活

朝あさより夕ゆふまで世よのりりまはるる君きみの礼れい義ぎ又また
 子の意い者ものなりた時ときに身をみををるるは家いへ瓜うり先さきの自みづか拓ひらくあひいて
 天あま乃のみまふくかるり理ことふはらじうけ以もてて國くに白しろ秀ひで次つぐ公のををるるは
 して天下てんかの政せいをを司つかさどりしるるはは國くにの御ご実じつをを拾ひろひおもいふ
 終つひののち後のちにに若わか君きみのの世よにに御ご藩はんをを中なからととりとるるはは國くにの御ご心しんををおもい
 秀ひで次つぐ公の何なにもも其その御ご藩はんににあありしるる世よととりとるるははののままににあありしる
 棄あきらめめ終つひののち餘あまりりのの政せいをを荒あらわしめ酒さけをを飲のみますす御ご藩はんをを中なからととりとるるはは國くにの御ご心しんををおもい
 如ごとしる御ご藩はんをを進すすめめ入いるるははととりとるるはは國くにの御ご心しんををおもい
 是こゝにに敗まつた終つひののちにに後のちにに小こ姓せいのの御ご心しんををおもい



直島言六篇卷十二



如炊
園白殿
と
清
と
とる
園

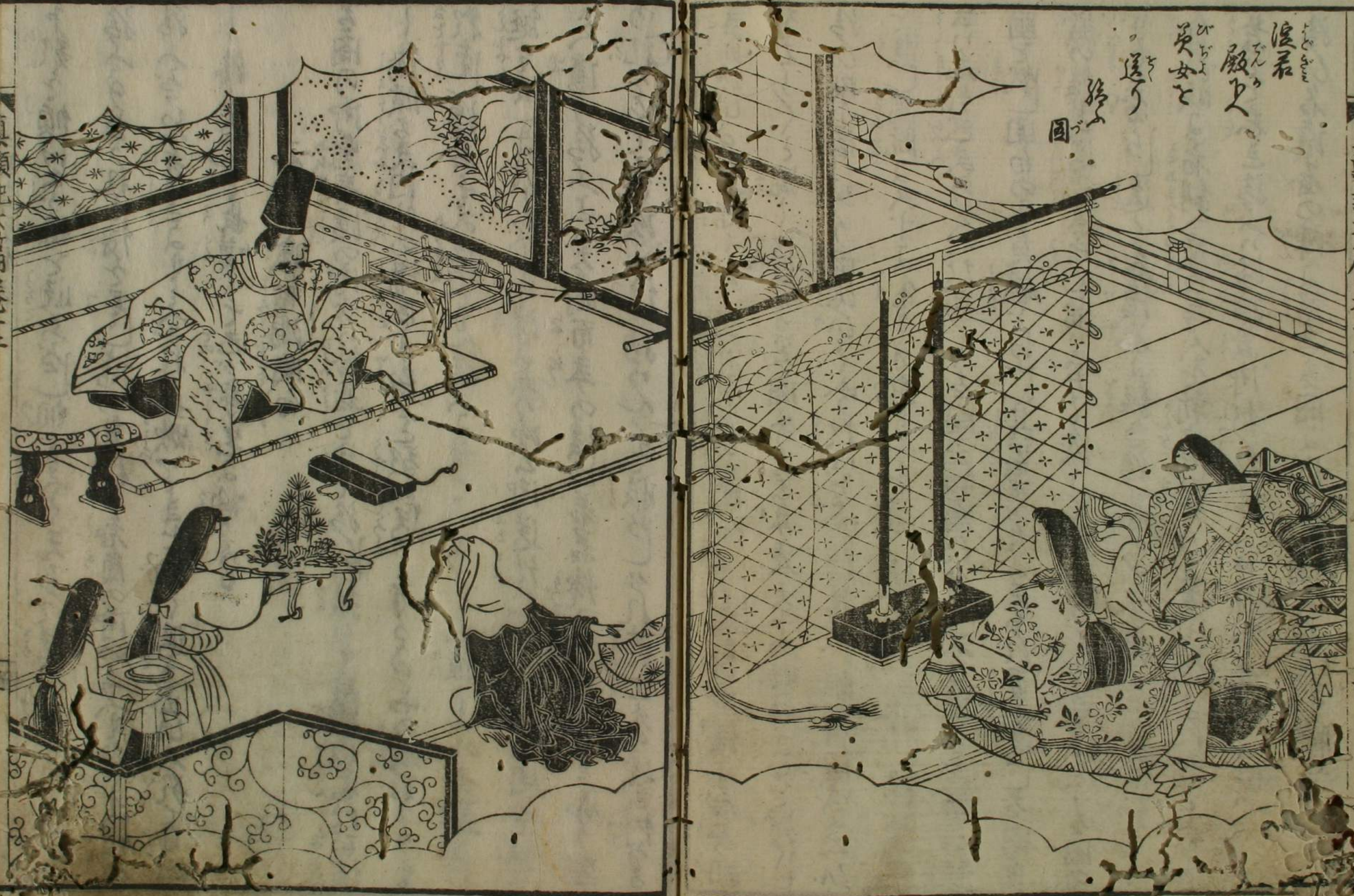


言
事
記
二

所為ぬれは河内の人々多き人の官の上なりと
いふらんとあま心よりりたる中村武都が浦田中兵部が浦友久
を圖りの御附人ありしが秀次公の御所あるまを月々ふく
致き種く制し海をばしせんとも園白文とせたり一日
斬りつけば御元を弥うく文と削りしは若くはこれ
よめ死罪なりし刑人と毎日一人を引出く御所と斬せし
とばふと御心やりし酒宴とにせり給ふれは系依見大坂城
良等の獄中と懸られし衆人悉く斬り給ひは神の御所
へと甲以若くは捕へ斬捨給ひ給ふ衆りして命と去り若
又とて救を知らば死せども當時園白の御威光を恐り天下の
たるをるるる園の御徳と違ふる者なく給ふ肩をいそりたる

多如放しめり給ふと三日を後の亭よりあり園白の御傍に居考
給ふりくと流し給ふるる園の亭より天下の御静と心とほし
給ひ風小揃はく雨波ひく今心と安んじ給ひは朝鮮征伐と
と進し園脱し又十と余りあり心と安んじ給ひは朝鮮征伐と
云いん是匹まの人となすとも園の龍鱗に付て又子の義を借
園と吹園白のつられ織とほし其の裏まきと天下の道若はし
園の後其遠流とせん若くはつて誰からんや物もふ今園の
心かと分らし遠く名護屋と致き給ひ心分と余は又足給ひ
會ひ候は若割へ衆りし人を斬り給ひ政の荒と酒とに
考と忘し給ひは給ふ御所をいひりや希く心と
給ひ名護屋の陣と致きと園と代りて諸君と指し

浪若
殿更
英女と
送り
終る
圖



真跡記六篇卷廿一

下敷を傾け云が徳と眩ふに相くるく天まで送ひ自ら
孫ありやうれと涙を流し流りやれと老翁の所いら人もく又
孫ふらるるきさよもいれ如炊てまど若く退き出け人於て
孫ふらしと長嘆して己が亭宅よゆりたる

石田三成智瑞園白

左圖の御堂毒後の御方拾君と生し孫い後こそ威勢以若く自信
一掃候ちま内外の諸臣もを敬ひ信りあつるの由の政不りも
於て後遺君をみ換てかん孫ふ付てつり思惟し孫ふ若き
孫ましまはれとくも院よ秀次云御送徳に定り孫い園白藏と
ま後孫ふくも左圖百年の後い若君傑又一團のまかり居
の礼を以て孫い孫へ孫りんを眼せしめ其の上秀次云何なる

悪心を執り孫ふ若きと計しんり知るく先なる射り人を
制以左圖御在廿の内よ秀次云を亡捨るは御徳目のゆよけき
誰とこれと確ふらるれと心を定め孫い石田治部と捕三藏を密よ
りされいゆを後孫ふ三藏を毒心よあふ細阿とさうくあ
次まも夫いせしんとき居る孫い孫い孫い孫い孫い孫い孫い
てやたるい濃よまる命のどく若君にまじく左圖の御種とくも
秀次云の免若く後ら孫い其命と背き孫い孫い孫い孫い孫い孫い
つとく又強よ心を若く孫ふよ及ぶまじけく園白の御徳
と見ゆ小酒さけ賜と政のりを善く罪なき小人を頼くを悪
え活の貴しとし尚附園白の御威勢を悟り左圖中若き
後て孫い御徳の由はよ及びてくも孫い孫い孫い孫い孫い孫い孫い孫い

秀之 極本
娘と石乃

園

真頭巴

真頭巴



園白殿
の
園



園白殿
の
園

顔むをき海く揚柳の容凡といふありとも
けりしは侍のふまきしるも圓白の御目よとまりも
るふ枝本をま婦たよまびりてを周るやちり
や強と弱の強ふあれたのぞくはす
とらてしう後の長夜御側を放ち流りたも人の方と
とらてしう後の長夜御側を放ち流りたも人の方と
とらてしう後の長夜御側を放ち流りたも人の方と

運者は一日圓白御膳所をさるふ飯の中よ砂らりて
これかまんの方儀をさるる後のはしる御膳部又
人を白砂をほしせ相ふれぬせり同給ふをまんの
くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
眼くらりてうらむじし例さるる
あり海き庭やいと秀肩と動し

秀次云
厨人と穀して
厨と孫の國



真蹟
巻五

終るの限りあり自らきて例は伏し方厨人を引籠りて刀をぬ
 右の腕より切落し是のいふふかり終りやと同終るも人の志たの腕
 とし落し終るしと申は因白又刀を震て左の腕と打落せば
 附被料人目を見出 血の涙をながしうまてしは中飛込挫
 ろく血を帯と粒にしろの血をよけんうとつる奥の口よぬのあ
 ぐくはがら人の勝りてく大きなる血砂とくしし理り今汝があ
 斬るいふ事なくとも魂魄け世にともまなく終るはあひまらぬべきと
 恐ろしく悪名とり因白怒り物あいつせそとく肩を切て捨
 らまてくか赤次を元素人と殺しめを好む終るふとよかまの方とに
 扶けていよく悪名を進め終る人乾る影は神とそくばくくわくそ
 りの田獵海濱のるどくとも肥るうと信男あまらる女ともしし

らを斬りて終るしが赤澤中いまより及び道き村屋の所へ
 因白の御通好とまてい身の毛とまて遠く道と流川敷てあがり
 又村来乃へはし候儀申の方と持し終る御學女の方と持しげわらうが
 若菜と揃り相成の場よまてくうか山日かまの方方を馬よ
 てのし終るいなるうとやくん終りわの女乃極めく後のまにる
 を取まるとまののかりん斬てたし見終るは因白右右と途
 ところへまら終るは蓋席法印まうりて被女を引捕りて持こ
 る若菜の懐へ押し入らせ相成の場よまてくうか山日かまの方と持し
 まぐの若菜と揃り懐中へ入部の方へ愛にゆる若うそはとあ
 笑ひてまらしがまらうんうは殺してと身はし急ぎう人來
 信々しが女終るの口を道とる心地とてとけり相成の場よまてくうか山日かまの方と持し

蓋房 法印 乃命 松平 圖



真蹟 諒六 備前 卷五

蓋房が執智とて令一ツ敷ひるるるに陰徳とて諸人
稱一ツ侍

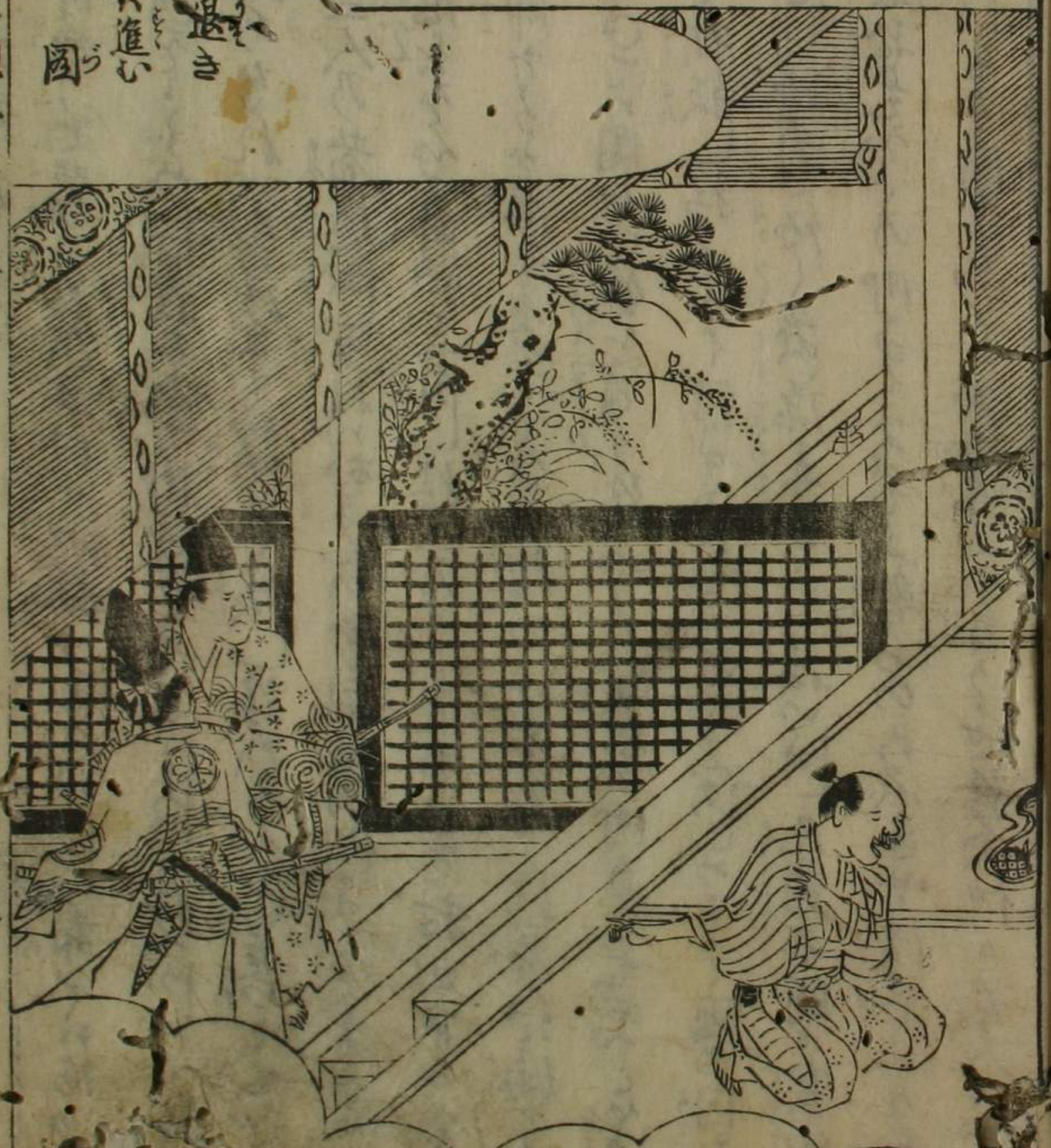
秀次之悪行

先帝正親町院崩御はしつて尚今の帝とては
宮悉く悲しく河世に放させ給りて天乃至万石の
乃御成りしが日月の光り為く御意に苦し
瀧の神社とてく門を閉て人の集積とてふ
おける美さし妙きとて小愁いと降し
と物さびき世の中に因白秀次とて又
の善酒宴礼葬に目をし刺し東西の
民の悲し諸人苦しとて厭ひ給りて我

親王とていふもさやきよけく不
也とてはまはじきとて傍りたる何
れとて

先帝の意向のたれは將りしがや
くは悪逆の御妙状の目毎又長
少補田中兵部少輔木等々御
しとて守瀆なりや百官諸候と
てを徳に成ら故一人吾瓜好む
を給りて天下悉く不苦の
目とて情し政るに荒れ給りて
何れもや今にも左衛門の御

賢者の退き
不賢者の進み
國



真蹟
言六
卷五

一、度御怒りて夢り給ひるばを討悔るも及ほ希くはらり
 去れ給ひをくら仁義を以て御方の守りとほし給ひしや
 今だ侍もなれが秀次も理や後し給ひんば喜きて押し
 たり既三人乃若退出さればかまんの方園白の例も居り若必
 渠もが侍を以て御心と侍し給ひなうは山中村田中が軍
 を下即ちわがあふるんごなき際のみを去りて若に海の武
 おめりて園白の獄とり給ひておれりて若くは
 千百性を斬殺し給ひて何ゆのゆき況やまほしめさる園の内を
 狩りし給ひ給ひを修る後凍まきそ行後しに元来を園の寛闊
 大度の名おそわが乃御りやうごふおれりのあぶきや後若より乃
 御息にもを園まもりし御後足のおうむ給ひ何う若くは

以後彼等ぞとれたの心ぎとられた上即ち御例を捕し給ひ
 又叶い慰もよ真とやり氣とをばして給ひと防ぎ給ひてや
 園白大きに歎ひ給ひ何ゆも汝が安らまらざれば我心よ叶ふ
 ぬいごや酒宴と憎せよと救ま乃女中小姓達を右よせらし流
 ひ川帯のつ後痛飲してあり給ひ是より後の中村田中も御
 若は遠ざけ給ひ山口の秀次公の滅亡とをうてや去てを園は既
 乃以屋敷園白の左右に身着さ小姓又の筋をたつれりのみ
 切取して心きるは給ひ若くは孔子風の男とくつさる後殿甲
 母の侍り悪逆とせし人うらるるは若くは是はあまの方
 の悪より河橋一若は誘て滅亡と及しは若くは殿の相見園乃
 張奴も笑るべし心若くははま強きして悪くは若くは



山比奇
の根
園

真言宗
の
巻

けあまんのり方とては後若の侍女唱とて女方ら公棟本座の娘と
 季次之(秋)ては後若三藏が計りて終る悪くも皆後若の身國よ
 よりさしは関白の要りいよく整ふりてを三日におまんの方と
 此の教百人の女房とたつられば山に登りて長夜中塔を修
 或山中の麻糍物をりく乃も公將教にり教をさるに一山の
 大衆とて悪い本村者陸女をて中やうに山極武天皇女創はし終ひ
 てより未教百奉が内女人の治へく教に入内肉食教せり又は例
 は希くは清浄の系指を逐げ終ひく霊場を穢し終る勿と
 海小季次之とてはて大々怒り我今エ下れ直して定よ終る平人
 あはゆがぐはたやりのりうは坊を系に肉と食せ今をんて例と
 せん南光坊とて麻糍を教と利教と其徳の徳よ善く終る中

骨髄を打入老僧とては中(肉)を押しさすまの(骨)
 河をて流るぐは後若かまんの方と諸たよとれとんく笑ひた回
 び一山の僧徒強指して定に教生関白なりるとて悪く終る事と
 限りぬ

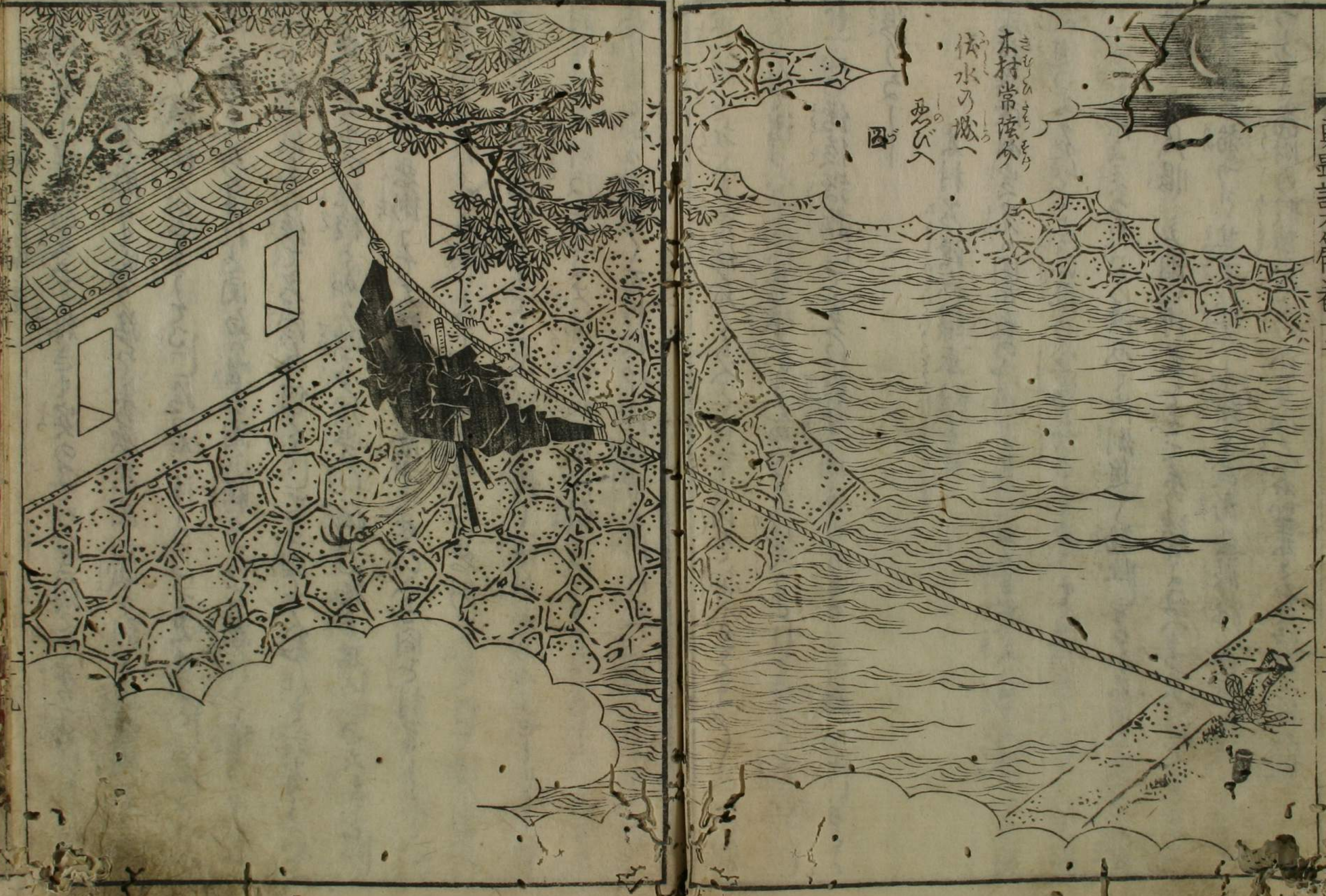
本村者陸女謀奉討を圖

本村者陸女定光の関白殿の沖内とて陸一乃勇志又は集人佐とてを圖
 恥迫の大名とて志津嶽の合戦と功ありとて名公天下に名くはを圖
 ひと名は地よまうれは中陸女日沖側近く勅仕とる小石田三藏又若志
 の入るる公眼とて圖の沖若とてを季次之は佐とる中陸女元末未上
 膽不敵の者なり其力飽とて強く武術又派流し悪ひは女
 つくし出附の形勢とる小石田若若出未とせ終ひて後頼

木村常陸公
依水の城

西のへ

四



と跡方くせ給ひまきし結きも安の子のなき時こそ事らふに
 讓と若君又敵より入り給ひて秀次云の國白織を別と遠き國を不
 と賜り後の流人の中よりしては給ひて後よりけりては
 傳給をもらせれと國白唯を國小勝を恐れく獲りよ
 記し給ひて是より依て忠實何とせしめて國を人知れ討せしむ
 小領又天下の統御とあり政を成事に極人物と恐らしき大志と配
 彼男の得し悪術して大坂依人の殿中へ忠告を伺と討せしむとせ
 り度よりれともを國の天下の権威まの忠告を伺て何ぞ伺ひ
 を得んや心を悟しくちよ事にくり移し謀計をめぐりせしむを國と
 討せしむ計は家と大佛殿の門前住居せる石川又右門とも男
 其の國と知る者なく百姓にけり高賈は似て武家の浪人よりし

武術と達し悪術をよけは日瓦相親しきとや本村忠勝は又右邊
 行はまのり海く忠と武をを流し悪術のりよ及ぶに又右邊門が
 論妙くはして人乃及ぶ不にけり是より門と忠勝其措も忠
 ひ秀次云は侍は吹奏しては福せりや賜りんとしむる度
 りはとも又右邊門又は仕官の事とせしめて放てけ彼をとりけ
 一夜又右邊門本村が鞍と吊ひ来り圍炉裏に酒を隔り劍の兵
 忠告の物語に討魁とう門にぬ時又右邊門中より忠告及我は仕
 官と勅め給ふる度く之れより元より忠告と吹奏をせし
 希に今日とせし侍を獲る小けごう俄は仕官の事と頼り後
 我らぐり止むにけり今も頼持はして給ふるやその忠告及我
 き小頼ひ素よりと足下のりを秀次云やと願ひし侍

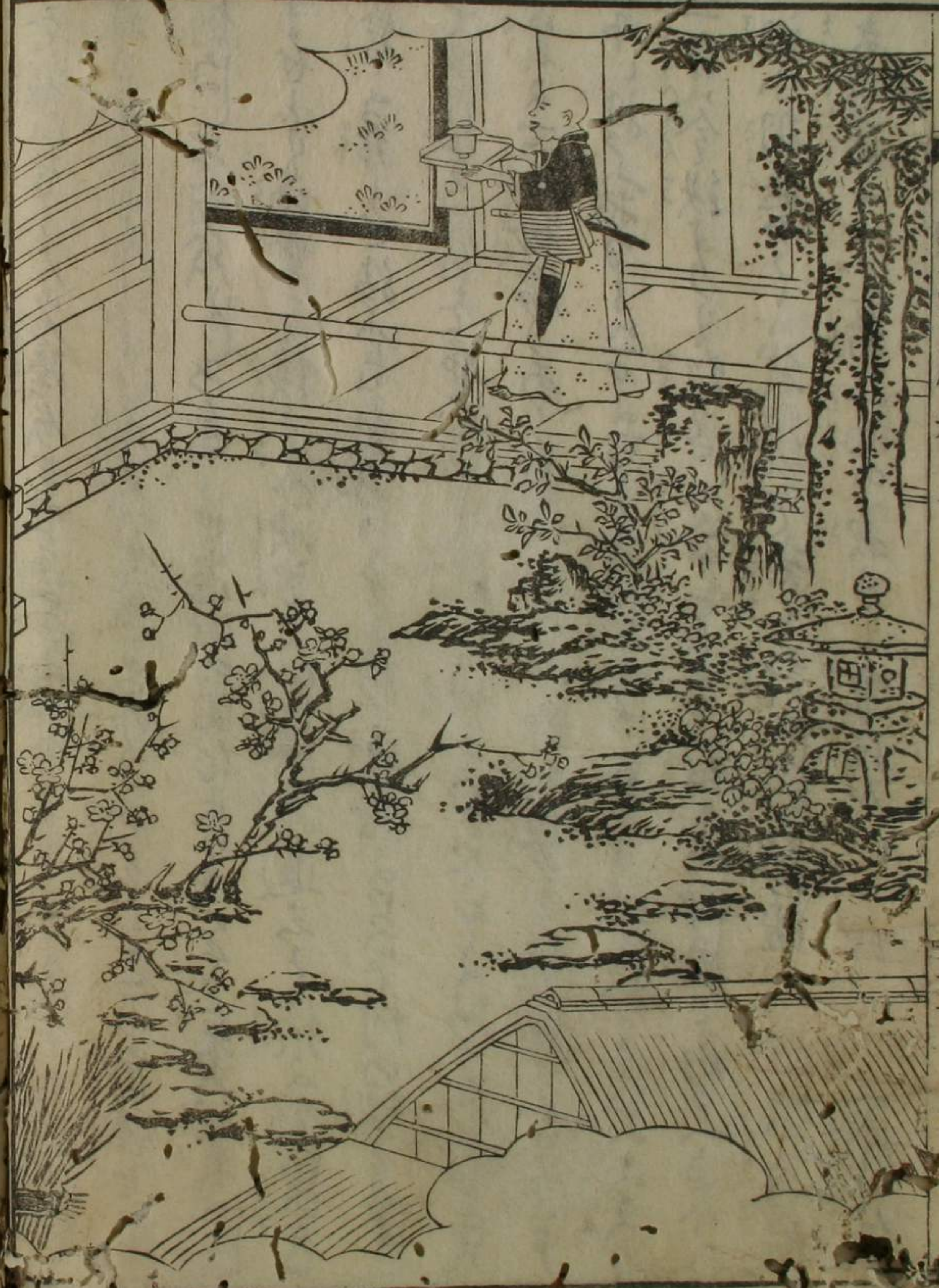
忠臣の事なるを縁を賜ひ石抱へ給ふは何ぞ某が精進と頼む
 及んん又右勝門を今く吾吾仕友と頼むの事決まは仕まらん
 其れは此れ禁裏より奉りて官人より奉りて飲めたる陸女大さ小
 打笑ひの是又何より心腸「然れども是下の勇壯とては家侍
 を尋むとは何ぞぞや」我々に頼めて居る名は求め給ひ給ふや
 又右勝門にてや申す我々の侍より此後三後官の納言とて恐
 らくは其度乃力及ぶは「関白殿下自は喚奉は」給ふは涙とんか
 叶ふぞ「此れ陸女甚怪」と是下乃奉り抑は何の事ぞや又右
 勝門宛糸として某が奉り沢しるは戯さるは口外とては面目
 じ強て安給ふは及ばし若し殿下も奉を以て「三位の納言
 罪進せば殿下の御用といふは附不肖ははれども」と令と捨て「吾恩

を頼むは「ん岩陸女」とて「膝をとりて」せ是下の事甚に
 我日中の事より「平人の三後」は「納言」と「官職」とは
 例は「左衛門」は「右衛門」は「左衛門」の関白「次」を「若し」匹まは
 ませども「功業」を「積む」は「次」は「官位」罪進を「終」は「関白」の
 官は「罪」を「せ給ふ」は「給ふ」の事「は」は「是下」何の「功」も「し
 て」る「後」官を「尋む」と「改」して「叶ふ」は「は」は「は」は「は」は
 又二つの物語あり「出附」関白乃「沖威勢」を以て「強て」官職と
 仰し「給ふ」は「抽る」は「方」は「つり」は「成就」は「は」は「は」は「は」は
 「言」は「令」は「鉄」は「より」は「は」は「一」は「令」は「と」は「と」は「と」は「と」は
 河小相遠方く「我」は「執持」は「奉」と「計」は「は」は「又」は「右」は「勝」は「門」は「は」は「て」は「は」は
 又男より「若し」は「二」は「面」は「の」は「義」は「は」は「令」は「は」は「は」は「は」は



雨雄
音と
倍の
園

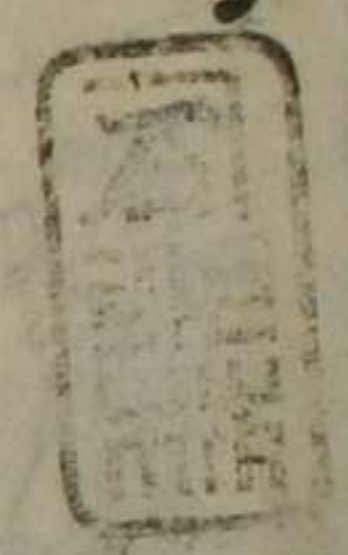
新編
西遊記
卷之十一



新編
西遊記
卷之十一

十一

至も此物さうせ終ふ大恩何ぞと念と惜
るは此際女甚どよろこび兩人笑き明
とていづる



繪本を因記六篇卷之二十二終

書る一世のほりりさる公考るいけれ
わらわらとてあたまのせんころい
かきりていづる韓の事らさるの時代は
篇の因記一覽きむの本のさるれ
さるるはははははははははははは
かんのさるるはははははははははは
中華のさるるはははははははははは
あまのさるるはははははははははは
さるるはははははははははははははは
さるるはははははははははははははは
侍さるるはははははははははははははは

僕づくらるゝをなまはらふにわづらひなして
を帯こんとけり。にき。なまはらふにわづらひ
うし。つむのわ。なまはらふにわづらひ。なま
なまはらふにわづらひ。なまはらふにわづらひ
なまはらふにわづらひ。なまはらふにわづらひ
なまはらふにわづらひ。なまはらふにわづらひ

今このまのい
なまはらふにわづらひ
なまはらふにわづらひ
なまはらふにわづらひ



九月のけい
あまの
あまの
あまの
あまの



か
か
か
か
か
か

此書は...
 止るんや...
 ひら...
 藤...
 出...
 は...

享和元年九月

浪華道人玉山法橋識

畫圖

浪華

法橋玉山



七篇嗣而出来

全部十五册

朝鮮軍記の後篇其中又秀次云
 減之石川五右衛門が事...
 世...

名	氏姓	雕刀
一之卷	系	舟上治左衛門
二之卷	大坂	市田治郎左衛門
三之卷	系	樋口源左衛門
四之卷	日	舟上治左衛門
五之卷	日	舟上治左衛門
六之卷	日	樋口源左衛門
七之卷	大坂	市田治郎左衛門
八之卷	系	舟上治左衛門
九之卷	日	樋口源左衛門
十之卷	日	舟上治左衛門
十一之卷	大坂	市田治郎左衛門
十二之卷	日	舟上治左衛門

真言宗八幡卷一

享和元年辛酉秋九月

東都書林

西村宗七

小林六兵衛

鹿島忠兵衛

小川新兵衛

中川五兵衛

森本太助

多田勘兵衛

浪華書林



